

駿河徳山の「狂言」テキスト (IV)

須田悦生

百姓狂言

是は今日おしやうしやのばん、なによふなことによらすうゑとふ  
ゑ申あぎやうずんの事、おまへハイまづこゝもとにひやいたの  
おあたゝめましやう。マまかりいてたるものは、丹後の國の百姓  
まい年、御加れいとあつて、うゑとふ様へ」(三〇オ)おかざりの  
松をしんじやう申事、とふねんもあいかわらずもつてまいり、さし  
あげましやうかとぞんじて、まかりいでましてござる。さて〜日  
本一のひなみにいでおふたる事かな。よきみちづれ菅人、ほしいも  
のでござる。まづかうまいる。マ〇まかりいてたるものはたじまの  
國の百姓。まいねん御かれいとあつて、うゑ」(三〇ウ)とふ様へ  
おかざりのゆづりはおしん上申事。とふねんもあいかわらずもつて  
まいり、さしあげましやうかとぞんじ、まかりいでましてござる。  
さて〜日本一のひなみにいでおふたる事かな。よきみちづれお一

人、ほしいものでござる。あれへよきみちづれがみゑます。おいか  
けてつれに」(三一オ)いたしましやうよ。ヨ、イ。マどちぢやわ  
〜。マこちぢやわ〜。マなんじや、こちが事が。マ中〜。  
マさて又こなたにはいつ方へ御出被成ます。マおまへの御存と、せ  
いの高ひ男なれば、天の笠にきまして、きみすお友につれ、はな先  
のむいたるかたへ、たゞぬん〜と参り「マいかいきよりのお人ぞござる」「  
(三二ウ)マさてまたこなたにはいつかたへおんいであそばされま  
す。ママそれはおまへの御そんじとせいのひくい男なれば、天  
のかさにきまシテすマきみすおともにつれ、はなさきのむいたるかたへ、  
ぬん〜とまいります。マいかいすね事なお人でござる。マいんすのふ  
みかすね事と、おまへのきよくり事と、ぬつ〜こつ〜とつかまつ  
り、もはやしんじつなやりましう。」(三二オ)マしんじつとおつし  
やりますか。マ中〜。マたんこの國の百姓、まいねんと御かれい  
とあつて、うゑとふ様へおかざりの松をしん上申事、とふねんもあ

いかわらずもつてまいり、さしあげましょうかとぞんじて、まかりいでましてござる。さてまたこなたには、いつかたへ御出なされます。〽それかしかたじまの國の百姓。まいねん」(三二ウ) 御加例ごかけれいとありて、うゑとふ様へおかざりのゆすり葉を差上申事、とふねんもあいかわらずもつてまいり、さしあげましょうかとぞんじてまかりいでましてござる。〽よふゆふたものでござる。〽よふゆふたものでござる。〽うしはうしづれ、馬はうまづれ、百姓は百姓づれ。よふゆふたものでござる。さあづさあづごびりませ。〽(三三オ) 〽のふ申。〽なんでござります。〽なんと、おしよしやのばんばんにしる人かたはござらぬか。〽しる人とおししやひますか。〽中々。〽しる人こそこそござる。〽ころやすうおもわしやれ。〽ハイ。〽おつつけとかう申うち、このうちでござる。それにやすらいでござりませい。ものもうのとふてみましやう。〽みともののかと、わいかうちがうて」(三三ウ) おります。〽ちかふたとおししやいますか。〽中々。〽とごもとが、ちがうでござる。〽みどものかり、此町づんどゆきぬけまして、かねのてなりにきりりつとたちまはりしてつてとごもとでござる。〽いかいおどけ人なお人でござる。それにやすらいでござりませい。ものもうのとふてみましやう。〽(ハ) (ハイ) 〽(ハ) もの」(三四オ) もふあんない。〽ものもふ、どふれ。〽丹後の國の百姓。〽たんごの國の百姓は、なんのためにまいりてある。〽まいねん御かれいとあつて、うゑとふ様へおかざりの松をしん上申事、とふねんもあいかわらずもつてまいり、さしあげます。うゑとふ

ゑのおとりなし、おまへは、あい。〽なんじはたいげてまいつてある。おすいおそなゑませい。〽ヤイヤいなんじは菅人か、ゑい。〽(ハ) みちくどふびやう武人」(三四ウ) まかりこしました。〽そらくとふそらくませい。〽(ハ) (ハイ) さあ、たじま、あげてござりませい。みどもがをも、くちついでにちようとおげさつしやれてはくだざるまいか。〽(ハ) これく、百姓と申ものは、ぢとふやだいくわんにはみしられたがよいものじやと申。ちようとおげてござりませい。〽百姓のおめとはみぐるしい。のさばつてはなぶゑでやりましよう。〽(三五オ) 〽エ、はなぶゑでやらつしやれませ。ものもふ。あんない。〽大これく、御せんじやわ。〽じぶんはよふござる。いちぢしもうてやりましやう。〽いんや、その事ではない。おまゑちかいとゆふ事。〽やあ、なんじはみどもにきうめいなせられ、あはつてや。とつふとしづめて申ませい。〽たじまの國の百姓、まいねん御かれいとあつて、うゑとふ様へおかざりのゆずりはをしん上申事、とふねんもあいかわらず」(三五ウ) もつてまいり、さしあげます。うゑとふへのおとりなしおまゑい、はああい。〽なんじはたいげでまいてある。おすいおそなへませい。〽これはみどもがもつてまいる。〽もつてうせ、たんご・たじま兩國の百姓おまへ(ハ) 〽(丹後・但馬兩國の百姓、いかふくらわせられました。〽やい、うゑとふにも一だんと御きげんである。これへ参り、酒を」(三六オ) のんでかゑりませい。〽(ハ) (ハイ) 〽(ハ) うゑとふにも、一だんと御きげんである。めてたううたお申ませい。〽

## 花 折

○まかりいでたるものは、ひかし田仁兵へと申。まいねん、すこし花ばたお(四一ウ) たしなみますものでござる。きくますれば、このごろさんぐにをられたと申。まいてみまおふかとぞんじて、まかりいでましてござる。まづ、かふまるる。さてこそさんぐにおられたり。かなませおもなにとつて、ほかしおふきにふみあらしまた。なれども、こんどはじしんとく々に(四二オ) まちており、とらへておふきにたくいてやりましよふ。(左に傍書) まづこそもとにやすらいておりませう。

○まかりいでたるものは、このあたりの児こでござる。明日うへの、寺にしやうじん様がたの御いで、花見のくわいがござると申。それだしもまいりたさは参りたし。まいろう(四二ウ) よふはござらぬ。イヤ、こゝにまたひがし田仁兵衛と申、まいねんはなばたおたしなひものがござる。これへ参り、一ゑだたおり、ついしやうにもつてまいるふかとぞんじて、まかりいでましてござる。まづかうまいる。(四三オ) ○(左の丸を×印で消す) さてこそみこと(ついで) なはなかな。つぼんだのもござれば、ひらいたのもござる。つぼんだのをおりましやうか。ひらいたのをりましやうか。イヤ、ひらいたのは、さかりがないと申。つぼんだのおをりましやうよ。めきくほつきり。花がちつた。哥(おなじく、左に傍書) 花をふんではおしむしやうねんのはるの(四三ウ) よのしづかならんでさわがしきみよしの、山かぜにちる花までもおりてのこゑ

あらんとあとおのみみよしの、おくふかくいそぐ山ぢかな

○かつきめ、のがさぬらつくわらうせきくるしからず候。らつ花(四四オ) らうせきくるしからず候とわ、のべや山べにさいたる花の事、これほとみかきんせいとふとませおゆい、たまづちおゆいしておく中へ、はいておろうとおもふおのれは、いかいぬす人に而候。ぬす人におるても、やさしきぬす人にて候。ぬす人においてもやさしきぬす人に而候とわ、これほど(四四ウ) みかちそうする花お、なにおもつておつたやい。さればそのこと。明日うゑの、寺に、しやうじん様たちのよりあい、花みのくわいがござると申。それかしもまいりたさはまいりたし。まいろうはよござらず。この花おひとゑだたおり、ついしやうにもつてまいろうかとぞんじて、まかりおりましてござる。おのれが(四五オ) ついしやうにはよかるうが、しやうしんさまがたのおまへでたいとおもふおのれは、わかしゆづきにて候。わかしゆづきでもこさらぬが、とききそばにねるがすきでござる。○イヤ、あのせがれめは、すへごべくとした事おやりおるせがれめかな。イヤ、こゝにまた花おをつてとがになる(四五ウ) しゆがあるが、きかふか。○イヤ、ござるまい。○してもおじやる。なにとござります。

○(以下「中」と書き、左に傍書して消す) 花しようゑんがきらかにして、ゑいけんきうはくのちりおはきなねつせんぐわんのみちおみがき

さるかふざんにさがんで、みてのみや人にかたらん、山さくらでてにおりても、うゑずてにせんと申とき(四六オ) げんかあとお

△さあたじま、きいてござるか。おまゑにわ、うたとおつしやりますか。(マ)中々。百姓まことの事なれば、おまへで田うへうたでもうたいませうか。(マ)一だんとよぶござりませう。(マ)さあ、ござりませい。(マ)おまへには、うたとおつしやりませう。(マ)中々。「(三二六ウ)まことに百姓の事なれば、おまへで田うへうたでもうたいませうか。(マ)そふくうたいませい、哥。(マ)やあ、やあ、その事ではない。三十一ぢのことはをつなれてまいれ。(マ)ハイさあ、たじま、きいておじやるか。(マ)なんとおまへには、このはおつしやれますか。(マ)中々、おしらすをみまするに、ちりが一ツござりませぬ。「(三七オ)これはそゝのは五まいでもあげませう。(マ)十まいでもあげませう。(マ)とこなおし。(マ)十五まいでもあげませう。(マ)さあ、ござりませい。おまへには、このはおつしやりますか。(マ)中々。(マ)まことに、おしらすお見まするに、ちりが一ツござりませぬ。これはそゝのは五枚でもあげませう。(マ)十枚でもあげませう。(マ)とこなおし。「(三七ウ)拾五まいでもあげませう。(マ)ハイ、やい、そのことではない。松は松につき、ゆずりははゆずりはについてのうたれんがの事である。(マ)さあ、たじま、きいておじやるか。(マ)中々、ましてござる。(マ)なんとおまへにわ、あたたかなれんがくおしてこいとおつしやりますか。これくみどもおもひつきました。みどもが國もとで、どふさん(三八オ)どふさんなぞのよりあわつしやれ。ござんまめのつまつしやれ。おぶぎじやつくのつつけりけりのかな

やかなり。さあ、おまへまいり、おひまのもらいませう。(マ)さあ、ござりませい。(マ)おまへにはおひまのくだされますか。(マ)中々。さあ、あんじませう。(マ)中々。あんじませう。(マ)さあ、ゆふてぬけませう。(マ)中々。ゆふて「(三八ウ)のけましよう。(マ)かうもござります。(マ)なにといへ。(マ)きみが代のひさしかるべしににはかねでそうゑしすみよしの松。(マ)一だんとでかした。つぎの百姓、申ませい。(マ)たゞいまのとふり申す。きみがよのひさしかるべしにには。(マ)これく、おまゑのちもにについておつしやります。(マ)みがもち物とをしやれますか。(マ)中々。さてこそ「(三九ウ)みがもちものとをしやれますか。さてこそ」中々「(四〇オ)そおつしやります。みがもちものお、おまゑは、によきりつかありとだされませうか。(マ)いや、さしあけものについておつしやります。(マ)さしあけものについてとおしやりますか。(マ)中々。(マ)かぶもござりますか。(マ)なにといへ。(マ)ことしよりくにだいくわんもゆずりゑてとのもとくわかたみもふくわか。(マ)一だんとでかした。やあ、(四〇ウ)うゑとふにも、一だんと御きげんである。めてたうらくちうおまいくだりませい。(マ)あらくめてたやくな、あらくめてたやくな、きみがよのひさしかるべしにには、かねでそうゑしすみよしの松「(四一オ)ことしよりくに代くわんもゆずりゑて、とのもとくわかたみもふくわか、さ(四一ウ)御代こそめでたけれ

のぞんでのちのはるのごせつしゆ、もろこしのさこくかはらにみおすて、ゆふしらんげつへゆき、ゑたあらば又くるはるもさくべきに、こゝろなくして花おおる人、と申ときんは、『おのれなにかいぬす人にて候。』イ、ヤ、こゝにまた、花おをつてもとかにならぬ」(四六ウ) しゆがござる。イ、ヤおじやるまい。してもござる。『して』なにと『おじやる』花しやうゑんがきらかにして、ゑいけんきうはくのちりおはき、なねつせんくわんのみちおみがき、さるかうざんにさがんで、みてのみや人にかたらん、山さくらてごてにおりても『うへ』すてにせん、と申ときんば、花はおつて」(四七オ) くるしうござりませぬ。イ、ヤあのせがれめ、ろうゑいのしのみつと中おやりおるせかれめかな。イ、ヤもふいつく申きかせふ。これにつけすは、とらへて大きいたゝいてやりましょう。ヤイ、花ぬす人。なにおふせ候。もふいつくつきやろうか。つきやうなら、つきやうまでも。つきやうなら、つきやうでもよいに、どこともなげに」(四七ウ) つつきやうとわ、おのれはかどふの心も『ないか』かどふの心はおつきやれ。せどふの心『ござらぬ。かどふと申に、せどふと申は、おもしろい。かふもあろふか。なにとござります。』

(〇) この春は、花のもとにてなわつけて、花のもとにしばつておいておかしい。イ、ヤ、もふいつく申きかせ、さあく、これにつけたら」(四八オ) なわおゆるしてやるわいな。がわ、なにとおふせ候。この春は花のもとにてなわつけて、ゑぼしさくらと人はゆふらん。(〇)

イ、ヤあのせかれめおたゞちやうちやくつかま、つるてはなま、なわおゆるしてやりましょふ』(四八ウ) をゆるしてやりましょふ』(四八ウ) 『さあさあな』(四八ウ) わをゆるしてやるわいな。たつておじやれいな。もふちつとおきやれい。むづかしきこといわすと、たつておじやれいな。ななかく。あのみふなるせかれめを、おもて」(四九オ) を見てやりましょふ。兵衛殿、きよくもござらぬ。おまゑだはぞんぜいす、まつたくりよがいつかまつりました。此様成るみるいおてになわのあとがつきました。おやどもとへおかへりなされ」(四九ウ) ても、なからすこのよしをおつしやりてはくださるな。なにがさてひきやうしごくな。なにげなちそふ申とぶござれとも、なにもござらぬ。さゝをひとつあがりませ。いんや、くださるまい。なげにさやう」(五〇オ) をふせらる。花ぬすびとが酒のんでかいらたとは、よものぐわいけいがあしようござる。よものぐわいけいは、こなとそれがしがあいだ。事に所は山地の菊のさけ、なにかはくるしからずともふ」(五〇ウ) すときんば、ひとつこしめしてもぐるしゆうござらぬ。べしたら、くだされましょやう。兵衛どの、ひかへてござれ。『なれども』花は折たし、のやきはたかし。はなれかたないきのもとや、兵衛どの、みごとに」(五一オ) ござる。もぶちやうほうにごさる。なう、日もなやばんじました。わかをあげてかへるでござる。めでとふ和哥をあげておかへりなされましょ。あ、らうれしや、とふとやな、これ」(五一ウ) くわんおんのごり

しやうなり。これまでなにや是北川や彌やなうれしやな。かくてみやこにおとも  
せば、まだもやいのかわるべし。たゝそのまゝにおいとまと、ゆう  
づけのとりかなく、あつまへさしてゆくみちの」(五二オ)やがて  
やすろふおふさかの、石のとさしのころして、あけゆくあとのや  
ま見へて、はあなあおんみする、がりがねの、それはこしじ、われ  
はまた、あつまへかへるなぐりかな。あつまへかへ(以下欠)」(五  
二ウ)(終)

○

※明治二十一年写の乙本は今回翻刻した二曲で終わる。誤写・誤  
脱があり、仮名遣いの混乱も随所に見られ、口頭伝承によるため  
あろう、科白上意味不明となっている箇所もまた多くみられる等々、  
底本については検討を要する事柄が多く存する。また、前号でも  
記したように、同年に写された甲本との間にさえ、異同が生じてい  
るが、まずその箇所の指摘をし、その上での芸能的な、あるいは伝  
承的な問題点を検討しなければならない。これらはいずれ稿を改め  
て論じてみたいと思う。

〔平成七年(一九九五年)十月三十日受理〕

## 聖書のフェミニン・リーディング研究 (I)

鈴木元子

### 序論

文学批評の一つとして、フェミニズム批評が台頭した。フェミニズム批評とは、一言で言えば、例えば、J・カラーの『ディコンストラクション』第一章二節の小题のように、「女として読むこと」である。過去を辿れば、読むという体験は専ら男の特権であった。書くのも男であり、読者が男であることを前提に執筆された。女は男性読者の仮面を被って、こっそりと読んだものだった。ところが、一九世紀中葉の女権拡張運動に端を発する女性解放運動の広がりと共に、文学の世界においても、女性作家・女性読者の存在が公認されるようになる。即ち、社会運動としてのフェミニズム思想が、読解としてのフェミニズム詩学へと発展を遂げたのである。沈滞していた批評学界に旋風を巻き起こし、読者の性差という視点から、斬新で多様な作品解釈が生じ始めた。「女として読むこと」が提言されるようになって初めて、女が女として読み、そんな読み方

は可笑しいと言われないですむようになった。しかし女が読めば、それで「女として読むこと」になるわけではない。何故ならこれまで長きにわたって、男として読むことを学習させられてきた者にとって、これを払拭するのは並大抵なことではないからである。

では具体的に、「女として読むこと」とはどうすることなのか？ 前述したように、最初から男の読者を前提に書かれたものである限り、「女性読者が女としての利害関心に反して、男の登場人物の立場に身を置くように仕組まれている」のは当然なことである。しかし、もはや男としての読みを避けること。定説となっている読みでも、読み直して、男性特有の偏向があればそれを指摘すること。男にとって周縁事項や隠蔽したい事柄<sup>(4)</sup>でも、女にとっては重要な主題である場合もあるからである。

男尊女卑の社会と言われ続けてきた日本でも、「七〇年代後半以降フェミニズムの主張はある程度社会的承認を受け」てきたように